内嶋善兵衛編
地球環境の危機
—研究の現状と課題—

岩波書店，1990年11月刊
280頁　　定価 2,800円

岩波書店発行の月刊誌「科学」に掲載された論文から環境問題に関係するものを抜きだして，再編集したもの．43編の論文（といっても，オリジナルな論文ではなく，「天気」の解説に近い内容である）と科学時事，それに，本書のために書き下ろした各章のイントロダクションから構成されている．この本のカバーによると，「この数年，社会的，政治的に大きな課題となり，広く一般の関心を集めている地球環境問題．科学はその実態をどこまで明かにしているのか．地球温暖化，酸性雨，フロン，土壌問題，種の起源，原子力発電と地球環境といった課題に取り組む研究の最先端を，第一線の研究者が解説する」のが本書の目的である．

各解説は5つの章に分類されている．すなわち，

1．変容する地球大気（フロン，光化学スモッグ，炭素の循環などに関する9編）
2．地球温暖化と気候変動（温室効果ガス，異常気象，大気と海洋の関連などに関する12編）
3．生命の基盤＝土壌の危機（土の構造，窒素収支，土壌侵食，砂漠化などに関する9編）
4．熱帯雨林・酸性雨・種の絶滅（6編）
5．原子力発電と地球環境（スリーマイル島，チェルノブイリ，核燃料再処理に関する7編）

である．

あまりに解説の数が多いので，ここで，一つ一つ具体的に紹介することは出来ない．多くは，「土の危機」（88年10月号）と「変容する地球大気」（89年9月号）の特集号から収録されている．しかし，それだけに留まらず，原子力発電や野生動物の保護の問題なども扱っている．執筆者は，それぞれの分野でアクティブに活動されている方々ばかりであるから，地球環境問題に関する程度の高いアンソロジーというべきであろう．反面，やや難しい．私は，この際，土壌の勉強をさせていただこうと思って読んだのであるが，リトソル，ラトソル，ポドソルというようなまぎらわしい術語が次々に出て来るので参った．

「科学」の論文を再編集して単行本にするという企画は，これが初めてではない．約10年前「日本の自然」（坂口　豊編）が出版された．こちらの趣旨は，日本列島の原自然（人間の手の加わらない自然）を活字に定着させることである．その企画を情熱的に推進させたのは，編集部の名取湧子さんであった．現在の日本は，原野と呼べるようなものがほとんどなくなるほど人間による開発が進んでしまった．このままだと，近い将来，人間がいなかった頃の日本の自然がなくなるのではないかと心配になる．だから，そうなる以前に，日本の原自然の姿を活字に定着させておくのだ，という意味のことを彼女は述べられていた．私はそれを聞いて，何と格調の高い理念をもって本を出版するものか，と感心したことを思い出す．

それから10年．対象が，日本から地球になった．しかし，「地球環境の危機」とは，人間が原自然を改変する危機感とは違うようだ．むしろ，人間環境に対する危機感が社会問題の根底にあるような気がする．本書の構成はこのような社会問題をよく反映しているから，「日本の自然」と比較したら，人間的な要素が多い．「地球環境」とは（火星環境と区別するための言葉ではなくて）グローバルな自然環境という意味であると思うが，そこで，ミクロな土壌の構造，ローカルまたはリージョナルな大気汚染（光化学スモッグ，酸性雨，原発事故等），森林伐採など，グローバルでない問題が対象になるのは，“人間環境の危機”が局所的に問題になるからであろう．そのような問題のみであれば理解しやすいのであるが，単純な図式で語れないグローバルな問題（温暖化，オゾン層の破壊）が同列に論じられるのは，やや，違和感を感じる．もちろん，その違和感は本書のせいではなくて，1988年以来，政治問題となった，いわゆる「地球環境問題」に対する違和感である．

それにしても，一方で，生活の便利のために躊躇なく原自然を改変し，一方で，大気中の微量元素の増加が心配になる人間とは，何と矛盾に満ちた存在であろうか．

（東京大学海洋研究所　木村竜治）